

Dブロックの研究のまとめ 【公開保育・研究発表会：令和元年12月11日】
大阪市立中央小学校（公立）・大阪市立桃園幼稚園（公立）・
中央なにわ幼稚園（私立）・あゆみ保育園（私立）

公開施設 大阪市立桃園幼稚園
ブロックテーマ 「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げていけばよいか～ことばによる伝え合いを通して～」
施設テーマ (ブロックテーマに同じ)
指導講評 奈良教育大学 横山 真貴子 教授

1 公開保育 会場：大阪市立桃園幼稚園

○ 保幼の交流活動（5歳児）

「みんなで体を動かして楽しく遊ぼう

～5歳児同士でふれあい小学生との交流会への期待を高める～」

研究2年目は、近隣にある幼稚園や保育園であることから、5歳児が小学校での活動に参加する機会を増やしたことで、小学生との交流会への期待も早い時期から高まった。そこで、2月の「保幼小交流会」までに、5歳児同士が親しみ合うことで、より深まった活動になるのではないかと考え、新たに「保幼交流会」を行った。

(1) 1回目の保幼交流会・・・「いっしょにあそぼう」（10月3日）

3園の5歳児が集まって、サーキット遊びや縄跳び、玉入れやダンスなどをした。はじめは、同じ幼稚園や保育園の友達と遊んでいたが、保育者が、同じ遊びの場に集まった子ども同士で関わりが始まるように、「遊び方がわからなければ聞いてみたら？」「一緒にしようって誘ってみよう。」など、意識して働きかけたことで、お互いの遊びを見て刺激し合ったり真似をしたりして、一緒に過ごす姿が増えていった。

討議会では、子どもたちは互いに刺激を受け合っていたが、言葉のやり取りをするには、保育者の援助が重要になることや関わりがもちやすい遊びを精選して継続することなどについて共通理解した。

(2) 2回目の保幼交流会・・・「いっしょにあそぼう」（12月3日）

3園の子どもたちの関わりが増え、言葉で伝え合いたくなるように、事前に保育者が4～5人ずつの混合グループを構成し、子どもたちにはグループの目印がついた腕輪を渡した。当日は、その腕輪を見せ合いながら、一緒にグループの友達を探し、見つかるとう陣を組んで手首についた腕輪を照らし合わせていた。グループの友達と一緒に、サーキット遊びから展開した探検ごっこやグループ対抗リレー、長縄跳びやサッカーのシュートゲームなどの活動をした。

活動前にじゃんけん遊びをした時から盛り上がるグループもあれば、遊具で遊びたい気持ちが優先してバラバラになるグループもあった。また、言葉には表れないが、しぐさや表情

で思いが伝わっている関わりも見られた。保育者は、子どもたちの全ての姿を受け止め、言葉でのやり取りが楽しめるように援助した。

討議会では、『みんなはリレーしたいって言うけど、ぼくはもうやめたい。』や『〇〇ちゃんがいなくなって、みつからない!』など、困り感も味わっていたが、「そばにいる保育者と一緒に話し合いができた。」や、「今日はグループのリーダー的な役割を果たしていたが、自園では見られない姿で、成長に気付けた。」などの意見が交わされ、同じ場面にいた教師や保育者だから分かり合う子どもの育ちを共有することができた。

(3) 3回目の保幼交流会・・・「いっしょにあそぼう」(12月11日：公開保育・研究発表会)

前回と同じグループで集まり、体を動かす遊びに取り組んだ。3園の子どもたちは、前回よりも交流活動への期待が高まっていた。活動が始まると、グループの印がついた腕輪を見せ合って笑ったり、名前や顔を覚えて呼び合ったりしていた。リレーやサッカーでは遊びのルールが共有されたので、前回よりも戸惑わずに取り組んだ。「ぼくはこんなふうにしたいけど、〇〇君はどうしたい?」と、相手の考えを聞こうとするやり取りが多く見られた。また、緊張がほぐれたことで、いつも通りに自分の考えを通そうとするようになり、どこで遊ぶか考えがそろわず困る子どもたちの姿も見られ、それぞれに考えが違うことを感じたり、折り合いをつけて過ごしたりしていた。保育者は、解決に向けて話し合う子どもたちを丁寧に受け止めるようにした。

活動後は、公開保育と研究発表会であったため、大阪市内の小学校や幼稚園、保育園所の先生方と一緒に討議会を行った。「違う園の友達との関わりの中で、好きな遊びに存分に取り組むことは難しいと感じている子どももいた。」や「相手の思いを読み取りながら一緒に楽しもうとする貴重な経験になっていた。」など、何を学んでいるかを様々な視点から捉えた意見が聞かれ、子どもの学びや今後の課題に気付くことができた。また、「保育者は、子どもの遊びの様子を見守るとともに、もっと楽しんで一緒に遊ぶことが大切である」とか、「親しみを持ち合っている5歳児同士が、小学校の交流会と一緒に活動すると、どのような育ちが見られるのか期待できる。」など、保育者の今後の指導につながる様々な意見をいただいた。



2 各施設の主な研究内容

(1) 大阪市立中央小学校

「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げていけばよいか ～ことばによる伝え合いを通して～」

中央小学校では、5歳児が小学校の行事の見学・参加を通して小学校の活動を体験したり、小学生と交流活動をしたりすることと、小学校の教員が幼稚園・保育園の教育・保育内容を知ることを中心に進めてきた。

5歳児の小学校の行事への参加に関しては、1年目は、新たに11月の作品展に5歳児を招

待した。校内を園の先生や友達と一緒に歩いたり、小学生と共に1年生から6年生の図画工作の作品を鑑賞したりした。また、その際に2つの幼稚園が会場で一緒になり、あいさつを交わし合う場面も見られた。2月には、毎年行っている保幼小交流会「1年生になるおともだちとなかよしになろう」を行った。そこでは、5歳児が教室内で小学校での生活の話を聞いたり、ランドセルを背負う体験をしたりした。また、ペアで学校探検をし、5歳児の質問に1年生が答える場面も見られた。1年生はこの活動を通して、上級生になる自覚が高まった。

2年目は、6月に、1～6年生の縦割り班でゲームができるお店を協力して作り上げ、当日は店番とお店回りを前半と後半に分かれて行う「ふれあい集会」に招待した。5歳児は、10人ほどのグループに分かれてお店回りをし、いろいろなゲームを楽しんだ。5歳児がお店に入ってくると店番の児童は歓迎ムードで迎え、ゲーム説明もゆっくりめで丁寧にしており、ゲーム中は低学年の児童も優しい言葉をかけるなど、いつもと違った姿も見られた。また、卒園児たちは、懐かしい先生に出会ったり声をかけてもらったりして、自分の成長を実感することにつながった。



11月には、学習発表会の劇を児童が相互に鑑賞するリハーサル発表会に招待した。そこでは、5歳児も他の学年と一緒に、3年生の劇「寿限無」を鑑賞した。3年生児童は、5歳児が見ているということにより意欲的に演じ、特に5歳児の中に弟や妹がいたり、出身園の児童は先生に見てもらえたりということにより張り切っていた。また、5歳児が劇中のおもしろい台詞や動きに反応よく笑ってくれたので、児童はより張り切り、人前で演技をしたり、大きな声で台詞を言ったりする活動にさらに自信をもつようになった。

2月には、小学校で保幼小交流会「1年生になるおともだちとなかよしになろう」を行った。今年度は、交流を深めている3園混合のグループをそのままにして、1年生もグループに分かれて、保幼小混合のグループ同士で交流会を進めた。顔見知りのメンバーで小学生のグループに入った5歳児は、例年より緊張感が少なくリラックスした感じだった。1年生も年間を通してペアやグループでの話し合い活動を活発に進めてきたため、5歳児への声かけがスムーズで、和やかな雰囲気の中で交流を深めることができた。



教員がそれぞれの教育・保育内容を知ることに関しては、1年目は、就学前施設の教職員が、小学校の教育内容を知る場として、6月に1～6年生のたて割り班で毎年行っている「ふれあい集会」を参観の場として設けた。次年度に5歳児を招待する計画を立てていたため、集会の活動内容や子どもたちのたて割り班活動の様子、その際の1年生の役割や何を学んでいるかなどを見てもらった。また、1年目の10月に1年生

が行った道徳科、2年目の11月に1年生が行った国語科の研究授業を参観の場として設け、授業の進め方や児童の学習中の様子を見てもらった。また、その後に行われた研究討議会にも参加し、小学校教員の学習指導におけるねらいや留意点などを知らせる機会となった。

また、小学校教員が園での保育内容を知る機会として、3園の公開保育や保幼小連携・接続研修会に参加した。3つの園の公開保育を参観するとともに、その後の討議会で活動での取組の工夫や留意点を聞いたり、それぞれの園の実践を交えての情報交換を聞いたりした。3つの園の保育内容やねらい、保育方針の違いなどはあるものの、子どもたちの自主性や積極性は、小学校教員が思う以上に育っていることに気付くことができた。また、研修会に参加することで、接続の重要なポイントを学び、小学校での学習にも活かすことができた。

1年目は校長と担当者だけの参加だったが、2年目は、幼稚園・保育園の教育・保育内容を知る機会を増やすために、校内の校務分掌に新たに『保幼小接続委員会』を設置し、低学年の学級担任が保育参観や研修会に参加しやすいように調整した。そのため、10月に行われた保幼小連携・接続研修会に学級担任2名が参加すると共に、12月の公開保育・研究報告会に2名、1月の公開保育にも5名参加した。公開保育に参加した学級担任からは、5歳児の自主的な活動に感嘆の声が聞かれた。

この2年間の取組を通して、5歳児が小学校の行事の見学・参加を通して小学校の活動を体験したり、小学生と交流活動をしたりする機会が増えた。また、教員同士が相互に教育内容を知り合うことができた。今後は、より多くの教員が、保育内容を知ることができるようにしていきたい。

(2) 大阪市立桃園幼稚園

「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げていけばよいか ～ことばによる伝え合いを通して～」

本園は、4、5歳児1クラスずつ、2クラスの公立幼稚園で、子どもの主体的な遊びを中心とした教育に取り組んでいる。その中で、この2年間は、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞いたりして、言葉で伝え合う機会が増えるように、異年齢交流活動に取り組んだ。4、5歳児混合の2チーム、6グループに分かれ、ふれあい遊びをしたり、園外保育で手をつないで歩いたり、運動会の競技を一緒にしたりした。5歳児が「〇〇君は、どうしたい？」と、4歳児の思いを尋ね、同年齢同士では意見がぶつかることも、異年齢では互いの思いを重ねようとする姿が見られた。4歳児は、同年齢のクラス活動では、「やりたくない」と言うことも、5歳児と一緒にだと挑戦する姿が見られた。保護者から、「僕のお兄ちゃんは、サッカー上手やで！」と、張り切って話したと聞き、親しみや憧れの気持ちが育っていることを実感した。

今年度の5歳児は、昨年度に、4歳児として異年齢交流活動を体験し、5歳児から優しく受け止めてもらってきた。昨年度は、お店屋さんごっこをして、グループの友達と一緒にどんなお店にするか考えたり必要な物を作ったり、お客さんとの



やり取りを楽しんだりした。5歳児から、やりたいことを尋ねられたり、できないことを手伝ってもらいできあがった嬉しさを味わったりした4歳児が、進級して5歳児になったことで、より伝え合うことを楽しめるようになると考えた。教師は、遊びの中でその育ちを見つけて認めたり、日々の記録として書きためて教師同士で共有したりして、子どもの言葉による伝え合いの育ちへの意識を高めて取り組んだ。

自分の思いを言葉で伝えるには、豊かな語彙を獲得することも大切である。日々の生活の中で、絵本を見たり、物語を聞いたりして、言葉の楽しさや美しさに気づいたり、様々な思いを共有したりして、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な言葉の表現ができる力の育成に努めた。遊びの後に、振り返りの時間を持ち、みんなの前で話をして共感される喜びを感じることで、相手の話を聞くことを楽しむようになり、伝え合いたいという気落ちが生まれ、それが小学校の学習にも活かされると考えている。



保幼交流会で行った遊びは、園内では異年齢交流活動として取り組んできた。1学期から続くサーキット遊びは、探検をイメージするようになり、みんなが楽しく遊んだり挑戦したりするにはどうすればよいか自分たちでコースを考え、必要なものがあれば作り足しながら続けてきた。リレーは、5歳児が取り組み、運動会につなげたところ、憧れを抱いた4歳児が、運動会後に遊ぶようになった。教師は、子どもたちが遊び込めるように、魅力的で何度も挑戦したくなる遊びの場を工夫したり、目標を達成する喜びを感じられるように認めたりして、保育の質の向上に努めた。

5歳児は、保幼交流会を、同じように1年生になる友達との活動として楽しみにするようになった。顔見知りでない友達と遊ぶことに不安を感じていた子どももいたが、回数を重ねるごとに落ち着いた。保護者は、園生活の話の中に、聞きなれない友達の名前が出てきて、新しい友達が増えたと感じている子どもの様子に頼もしさを感じたと話していた。そして、5歳児は、小学校の活動に参加する機会が増え、就学への期待が高まっている。校内に入ると、小学生や先生方が園児に優しく声をかけてくださり、子どもたちの緊張した表情が和らいだ。計画している交流活動以外にも、飼育しているウサギの名前を教えてくれたり、高い位置にある雲梯をやって見せてくれたり、いたるところで交流が始まり、偶発的な関わりを通して子どもたちの気持ちがほぐれていくのが伝わってきた。

教師は、研究を通して、教育内容を見つめ直す機会になった。育てたいことを明確にし、意図をもった働きかけを意識して保育計画を立て、子どもの姿から育ちを読み取り、それを教師間で共有し、次の活動に活かすようにした。今後も、今回つながった



近隣の保育園、幼稚園、小学校との連携・接続を継続し、地域の子どもたちが安心して、就学を迎えられるように取り組んでいきたい。

(3) 中央なにわ幼稚園

「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げていけばよいか ～ことばによる伝え合いを通して～」

はじめに、2年間にわたる連携・接続研究を通して、他園や小学校の保育・教育の環境と、教職員が子どもに接する態度や言葉かけなどに触れ、大変学ぶところが多かった。また、同時に自園の保育の在り方を振り返る良い機会を得たことに感謝している。

実践交流研究にあたり、まず園内での異年齢交流を進めたいと考え、園外保育で5歳児と4歳児が組んで一緒にゲームをする等、学年の枠を越えて過ごす時間を増やした。ただ、園全体として、5歳児が3、4歳児をリードするようなまとまった異年齢活動は、予定通りには進まなかったことが課題として残った。毎日行っている預かり保育では、3、4、5歳児の子ども達の活発な交流がある。自由に遊べる時間がたっぷりあり、顔ぶれも決まってきたクラスを越えて仲良くなる。同年齢児に対しては自信のない子どもも、年下の子どもに対しては優しく話しかけたり、遊びを教えたり、会話の中心になる姿がよく見られた。3、4歳児にとっても、5歳児の言葉に関心を寄せて聞いている様子である。時には、年下の子どもから5歳児に、「なんで？」とか「わからん。」とか「でも～や。」と返している姿が見られ、地域で遊びの集団がなくなっている現状ではこの関わりの積み重ねがどの子どもにとっても貴重な育ちの場となっていると思われる。

2年にわたって、公開保育として「おみせやさんごっこ」に取り組んだ。1年目の振り返りで、教師が決めた言葉でのやり取りになっていることに気付き、子ども一人ひとりが思いを伝える言葉を引き出すためには、何を学ばせたいかというねらいや指導の工夫が必要と考えた。2年目は子どもたちが提案したり、相談したり、役割を変えて遊ぶ時間を十分にとるため、活動の時間を増やした。担任は、これまで以上に子どもの意欲を尊重し、手直しをしたり、手を加え過ぎたりせず、子どもに任せる姿勢に努めた。その結果、子どもたちの主体性をより引き出し、それぞれが自分のお店という意識を持って自分なりの発言や工夫がたくさん見られ、生き生きとした楽しい活動となった。主体的な活動の中から、自分の思いや考えを伝え合うといった言葉のやり取りが生まれると再確認することができた。引き続き、日頃の遊びにつなげていきたい。



本園の5歳児の毎日の活動として、「お当番さんによるニュースの発表」をしている。当番の園児が、楽しかったことや驚いたこと、見つけたことなどをクラスの友達の前で発表し、それに対して、質問したり答えたりするように取り組んできた。この研究を通して、発表を聞く子どもたちが、グループで質問を考えたり、答えに対して自分たちの意見を言ったりできるように進めることで、さらに言葉のやり取りや話す態度、聞く態度の育ちの場となるのではと考えるようになった。

今後は、このような研究により多くの教師が参加し、就学に向けて自分の考えや思いを伝えようとする態度や、相手の考えや思いを聞く態度を育てる意識を高められるよう、継続して取り組んでいきたい。

(4) あゆみ保育園

「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げていけばよいか ～ことばによる伝え合いを通して～」

今年度は5歳児同士での交流を最優先に取り組んできた。他園の友達と会う機会や一緒に遊ぶことで、交流日に期待や楽しみの気持ちをもって参加した。はじめは、遠慮気味で同じクラスの友達とくっつき行動していた子どもも、回数を重ねるごとに、他園の友達と一緒に遊ぶ姿が見え始めた。中央小学校に劇の鑑賞に行った時にも、「あっ、桃園幼稚園の子が来たで。」「中央なにわ幼稚園の子も来たな。」「また、一緒やな。」と、手を振る姿も見られた。4回の3園合同グループでの取組を通して、はじめは緊張や不安などもあり言葉数が少なく、グループがバラバラに活動する姿もあったが、経験を重ねたことで自分の思いを話すようになり、4回目のグループでのクイズやカルタ取りでは、たくさんの会話を楽しんだ。カルタの札が取れずに、落ち込んでいる友達に、同じグループの他園の子どもが取ったカルタを渡し、応援したり教え合ったりする姿も見られた。

今年度は、小学校の「ふれあい集会」への参加や作品展、3年生の劇「寿限無」の鑑賞にも行かせていただいた。2月20日の1年生との交流会では、昨年度、保幼小交流で5歳児として参加した1年生が、1学年下の子どもに対して優しく、丁寧な言葉かけをしながら、ゲーム遊びや、学校案内をしてくれた。年間を通して、小学校に行く機会が増え、子どもたちは小学校就学に向けての不安が減少し、期待感が増した。また、保育士は、1年生の1年間での成長の大きさも感じる事ができ、よい機会となった。交流を通して、就学に向けての準備ができることは、子どもたちにとってよいことと改めて感じさせられた。

自園では、長年に渡り3、4、5歳児での縦割り活動をしているが、ひと昔前に比べ、子ども集団の変化（人数増加など）、職員層の変化などもあり、年々取り組み方への配慮や工夫が必要な場面が増えてきた。

年度当初は、子どもたちが落ち着かず、1クラスでもまとまって遊ぶことが難しく、例年のような取組が厳しい状況にあったが、できないからしないではなく、どうすればできるかを考え、朝夕の合同保育の在り方や、設定保育時間での異年齢交流を増やしていき、11月からの3、4、5歳児の縦割りグループでの活動へとつなげた。10月頃までは、4、5歳児のみで取り組む方向で話し合っていたが、異年齢交流で獲得できる力や、なぜ取り組むのかなどの保育者間の話し合いを繰り返す中で、どうしたら3歳児も一緒に活動できるか検討する考えに変わっていった。



また、昨年度の公開保育でいただいたたくさんの参考意見を保育の中に取り入れられるように、保育士間で話し合った。「知・徳・体」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕については、まだ浸透しきれていない現状もあ

るが、保育・幼児教育センターの方を招いて研修会を行ったことで、書面だけでは難しく感じていたことも、実際は日々の保育で行っていることが、全てつながっていることに気付けた。今後は、園で大切にしたい子どもの姿は維持しつつ、子どもたちにとってより良い保育とは何かを、あらゆる視点・観点から見直していき、就学に向けての取組を継続していきたい。

3 Dブロックの研究のまとめ

【1年目の取組】

○5歳児が参加した活動 ※教職員のみが参加した活動 指導助言：横山真貴子教授の指導

日 時	活 動 内 容	場 所
6月27日	ふれあい集会（1～6年生の縦割り班活動）参観 ※	中央小学校
	保幼討議会（ふれあい集会参観後の討議会） ※	桃園幼稚園
10月22日	道徳科研究授業（授業参観・研究討議会） ※	中央小学校
11月16日	小学校作品展鑑賞（5歳児参加） ○	中央小学校
11月19日	公開保育「お店屋さんごっこ」・討議会・指導助言 ※	桃園幼稚園
11月28日	公開保育「お店屋さんごっこ」・討議会・指導助言 ※	中央なにわ幼稚園
1月17日	公開保育「なかよし遊び」・討議会・指導助言 ※	あゆみ保育園
1月22日	代表者会議事前打ち合わせ ※	中央小学校
2月18日	代表者会議事前打ち合わせ ※	中央小学校
2月21日	公開授業 保幼小交流会「1年生になるおともだちとなかよしになろう」（5歳児と1年生の交流活動）・討議会・指導助言 ○※	中央小学校

【2年目の取組】

日 時	活 動 内 容	場 所
6月26日	ふれあい集会（1～6年生の縦割り班活動 5歳児参加） ○	中央小学校
10月3日	保幼交流会「一緒に遊ぼう①」・討議会 ○※	桃園幼稚園
11月7日	国語科研究授業（授業参観・研究討議会） ※	中央小学校
11月21日	小学校学習発表会鑑賞（5歳児参加） ○	中央小学校
11月22日	公開保育「お店屋さんごっこ」・討議会・代表者会議 ※	中央なにわ幼稚園
12月3日	保幼交流会「一緒に遊ぼう②」・討議会・代表者会議 ○※	桃園幼稚園
12月11日	保幼交流会「一緒に遊ぼう③」・討議会・指導助言 ○※	桃園幼稚園
1月17日	保幼交流会「一緒に遊ぼう④」・討議会 ○※	中央小学校 (あゆみ保育園進行)
2月20日	保幼小交流会「1年生になるおともだちとなかよしになろう」（5歳児と1年生の交流活動）・討議会・指導助言 ○※	中央小学校

【成果】

- ・交流活動の機会が増え、子ども同士が親しみをもち合うことができた。
- ・保育、教育内容を相互に学び合い、教職員同士が理解し合うことができた。
- ・「言葉による伝え合い」を通して、学び合い、支え合う集団が育成されてきた。
- ・「言葉による伝え合い」の観点から考えた、「保幼小連携・接続カリキュラム」(P.100 参照)を作成した。

【課題】

- ・より多くの教職員が相互に知り合い、学び合う機会を広げていく。

4 指導講評 講師：奈良教育大学 横山 真貴子 教授

- (1) 12月11日保幼小交流会「一緒に遊ぼう」の公開保育を振り返りながら、小学校教育への接続について、奈良教育大学の横山真貴子教授から多くのことを学んだ。

〈公開保育時の活動の様子を撮影された写真を見ながら〉

- ・公開保育の日が3回目の保幼小交流会で、子ども同士の距離感が徐々に縮まり、信頼が深まり、笑顔が増えたことが伝わってきた。これまでの交流で感じた楽しさや喜びから、期待感が高まり、心を通わせる姿へとつながったと思われる。
- ・遊びの中に保育者も加わり、子どもの話を聞いて共感したり、一緒に楽しんで笑い合ったりすることが、楽しさを膨らませることにつながっていた。
- ・小学校を中心に公立、私立の幼稚園、保育園の枠を超え、「言葉による伝え合い」を共通の視点として、子どもの育ちを考えることをめざしたので、交流の機会が少なくても研究として各校園がつながる取組になった。子ども同士の実践交流ができなくても、教職員同士が同じねらいをもって教育活動に取り組むことが、子どもの育ちを共有することにつながる。

〈横山 真貴子 教授の講話を聞いて〉

- ・小学校教育との接続の中で「言葉による伝え合い」を共通の柱に、どんな学びにつながるのか、自園の保育は小学校教育のどの学びにつながるのか、各園の教育・保育の質についての振り返りが大切である。
- ・幼児期は「話し言葉」を中心に、小学校では「書き言葉」を中心に教育が進められているが、双方の言葉とも、体験が伴うことで深い学びにつながる。これらを教育・保育の視点から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕に照らし合わせた時、子どもたちには、「誰か」(友達や大人)に伝えたいような「経験」「体験」が欠かせないことが分かる。そこで、子どもの発達を捉える専門性のある保育者が、子ども自ら「誰かに」「伝えたい経験」に出会えるよう、日々環境構成や関わりを工夫していく必要がある。保育現場は、一人ひとりの子どもがその子らしく、のびのびと自己表現できる場であり続けなければならない。
- ・幼稚園教諭や保育士も、小学校学習指導要領の内容に関心を向け、小学校で行われてい

る授業等を理解し、自園の保育を見つめ直すことが大切である。

(2) この2年間の取組を振り返って

1年目は、中央小学校を中心に公立、私立の幼稚園、保育園の枠を越えて、教職員同士がつながり、それぞれの特徴を生かした実践を知り、相互の教育・保育の内容を理解し合うように努めた。「言葉による伝え合い」を柱に、小学校の授業や就学前施設の保育など、それぞれの取組を参観し合うことでよく分かり、大事にしている理念も理解できた。

2年目には教職員のつながりを基盤に、子ども同士の交流が主軸となった。同じ地域に住む同年代の友達との交流は、刺激的で、学び合いになった。特に、12月の公開保育に向けた取組では、3園混合のグループを編成し、固定化されたことで、居場所を確保できた安心感と交流の中で育まれた信頼関係が土台となり、「言葉による伝え合い」を意識した取組の回を重ねる毎に子ども同士の交流が深まっていった。支援の必要な子どもや外国にルーツのある子どもが増えている中、すぐにコミュニケーションが図れるものではないが、各施設の枠を越えて教職員が見守り、声をかけて交流しやすい雰囲気の中で働きかけ、子どもたちもその声に耳を傾け、安心してグループの輪に戻り、対話していく姿に、様々なつながりが子どもたちを育てていることを感じた。また、実践を通して、各校園が今後の課題や方向性を見い出せた。講師の横山先生がおっしゃったように、子どもたちが「誰か」

(友達や大人)に伝えたいような「経験」「体験」を、私たち教師や保育士は日々の教育や保育の中で育み、それを言葉や表現で豊かに体現していくことができるよう計画し、環境保障や交流の機会をこれからも継続しなければいけないと改めて感じた。また、2年間の研究の成果を活かして作成した「連携・接続カリキュラム」を活用しながら、今後も地域の保幼小の連携、接続に力を注いでいきたい。

平成30年度・令和元年度 保幼小連携・接続カリキュラム 実践報告書

「言葉による伝え合い」から考えよう！

研究テーマ「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げればよいことによる伝え合いを通して」

2年間にわたり、テーマに沿って研究を進め、共通理解したことをまとめ

子どものつゆき

- 0～2歳児 関心・心の安定
- 3・4歳児 自覚・自立・態度の養育
- 5歳児 社会性の養育
- 1年生のはじめ 自己発露・意図的コミュニケーション
- 1年生の終わり 学び合い

「言葉での伝え合い」を育む中で大切にしたいこと

0～2歳児 幼児は子どもが自ら好きなことに目を向ける機会を確保し、関心や興味を深めることにより、言葉の理解が促進される。関心と関わりが深まることで、言葉の理解が促進される。	3・4歳児 「自分でできる」という達成感を味わえるようにする。自分の思いを表現して、周りの大人に伝えることができる。安心感や自信をもち、近くにいる友達や先生と関わるようになる。言葉でなくても、表情やしぐさ、行動などで伝えたい気持ちを表現する。	5歳児 異年齢の子どもと関わる機会をもち、自分の思いを表現して、周りの大人に伝えることができる。安心感や自信をもち、近くにいる友達や先生と関わるようになる。言葉でなくても、表情やしぐさ、行動などで伝えたい気持ちを表現する。	1年生のはじめ 名前や年齢、性別などの自己紹介をとおして、友達と関わりを深める。意図的に話しかけ、話を聞かせる。友達と関わる楽しさを味わう。	1年生の終わり 学び合いを通して、友達と関わりを深める。意図的に話しかけ、話を聞かせる。友達と関わる楽しさを味わう。
-------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------

5 参加者のアンケートから

- ・他園との交流を通して遊びが広がったり新しい友達と交流ができたりと、子どもにとっても先生にとってもよい経験だと思う。
- ・就学前施設同士の交流については、マンネリ化していることを悩んでいたが、ヒントをたくさんいただき、楽しく前向きに充実させていきたいと思った。
- ・同じ地域で育つ子ども同士の交流は、育ちにとってだけでなく、子どもにとっても保護者に

とっても就学時の安心につながると感じた。

- ・それぞれの施設で大切にしていることはあるが、「連携・接続」を考える時に一つのテーマを決め、それについて取り組まれていることが素晴らしかった。自園でも先生自身が「やってよかった。」「こんなこともやってみたい。」と思える連携ができるよう努めていきたい。
- ・横山先生の「連携・接続」についての話が印象的だった。それぞれの施設が活動を通して育てたいことを明確にし、子どもの心を育むために意見を出し合われていることが分かり、自園の保育を振り返るきっかけとなった。
- ・就学前施設での保育を参観し、子どもたちの姿から幼保の教育が小学校の教育へとつながっているのだということがよく分かった。



幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿
「言葉による伝え合い」から考えた！！

平成30年度・令和元年度 保育・幼児教育センター指定
保幼小連携・接続研究事業 Dプロジェクト 作成

たにきゅっこ あっせれ！

保幼小連携・接続カリキュラム

研究テーマ「就学前教育と小学校教育の接続の充実を図るためには、どのような実践交流を積み上げていけばよいか〜ことばによる伝え合いを通して〜」
2年間にわたり、テーマに沿って研究を進め、共通理解したことをまとめた

子どものつばやき

0～2歳児

愛着・心の安定

ぼく 誰かい
上手でしょう？



「少なべなべそこ
ぬけ」一緒にしよう！

入れて！
いいよ！

子どもの言葉

教師・保育士の言葉

3・4歳児

自我・自立・語彙の獲得



「いいよ」って言った
ら、友達がいっぱいに
なって楽しいね。

友達に応援されると、速く
走れるね。バトンは、次の
人に大事に渡そうね。

5歳児

社会性の獲得



リレー

1年生のはじめ

自己発揮・
言語的コミュニケーション

黄色チーム、こっ
ちこっち！バトン
ちょうだい！



絵本の読み聞かせ

はい！元気です！

1年生のおわり

学び合い

上手に弾けるように
なったよ



鍵盤ハーモニカの演奏
がんばって練習
したもんね！

「言葉での伝え合い」を育む中で大切にしたいこと

0～2歳児

乳児期は子どもが出す様々なサインに目や耳を傾けながら
声を掛け、微笑み返すなど大人が丁寧に関わることで信頼関係
が豊かに育まれる。対大人との安心した関係が土台となり、友
達や先生など他者への関心・興味は広がる。様々な遊びや経験
から生まれる共感「伝えたい」思いへと繋がりが、指さしや一
語文・二語文・多語文と世界は広がる。0歳児では、大人の優
しい言葉や表情と共にわらべ歌やスキップ遊びを書き、
1.2歳児になると、友達や先生とのままことなど生活再現遊び
や簡単な集団遊びが広がりが「楽しい」「話したい」気持ちに増
える。その思いは誰かに「伝えたい」「話したい」気持ちに変化
する。その時「楽しかったね」と思いに寄り添う友達や大人の
存在が大事である。

3・4歳児

「自分でできた」という達成感を味わえるよ
うにする。自分の思いを表して、周りの大人
に受け止めてもらい、安心して過ごすこと
で、近くにいる友達に関心を持つようになる。
言葉だけでなく、表情やしぐさ、行動で
伝えようとする姿を認める。思いが伝わらな
いと、乱暴な行動や言葉になったり、泣いた
りすることもあがる。それらすべてが、育ち
の過程と捉える。自分の思いを受け止められ
ると、相手の思いも受け止めようとするよう
になり、感じたり考えたりする経験を重ねら
れるようにしていく。

5歳児

異年齢や小学生、地域のお年寄りや乳児など
様々な人との関わりを楽しむようになる。グル
ープで話し合ったり、ルールのある遊びを楽しん
だりする。その姿を踏まえ、相手の気持ちや考え
を聞いたり、話したりしながら、言葉によるコミ
ュニケーションの大切さに気づけるようになる。
また、絵本の読み聞かせや物語のイメージを表
現したりする楽しさを味わわせ、豊かな言葉の獲
得につなげる。歌の歌詞を理解し、書きやリズム
カルな言葉などへ関心をもてるようになる。カル
タや郵便屋さんごっこなどで文字への関心も広
がるようにしていく。

1年生のはじめ

名前を呼ばれたら大きな声で返事
をしたり、元気に「おはようございま
す」「さようなら」などのあいさつが
できるようにする。
絵本の読み聞かせを通して、人の話
を最後まで聞く態度を身に付けるよ
うにする。また、話の内容を伝え合
う。カードに自分の名前をひらがなで
丁寧に書き、自己紹介しながら名刺交
換することを通して、たくさんの方だ
ちができたことを書き合う。

1年生のおわり

学習中、自分の考えや思いを伝え
たり、友達の考えや意見を聞いたりし
て学び合おうとする。
保幼小交流会で小学校の紹介をし
たり、園児と会話をしながら校舎巡り
をしたりして、小学校生活をやさしく
教え、園児に小学校への期待感を持
てるようにする。
学習参観で、1年間でできるよう
になったことや2年生でがんばること
を保護者に伝えるように工夫して発
表する。

3 2年間の「保幼小連携・接続研究」を振り返って

各施設の校長先生、園長先生、所長先生を中心にして、現場の先生方の「なんとかやってみよう」の気持ちに支えられ、各ブロックそれぞれに特色ある「保幼小連携・接続研究」の取組を進めていただくことができました。そして多くの成果と次への課題が明らかになりました。

また、各ブロック各施設のこれまでの施設運営や教育・保育方針、これまでの「連携・接続」の経過や実績を基に、互いに考えや実践を交流・公開し、講師の先生の助言や指導を得ながら、各施設の教育・保育の質の向上とともに、「連携・接続」の進め方や在り方について方向性も少し見えてきました。

〔成果〕

〈子ども〉

- ・交流会等を通して、幼児には、そこで経験したことを自園自所での遊びに活かす姿や次回を心待ちにする姿、他園の友達や小学校のお兄さんやお姉さんと時間を惜しむように遊ぶ姿等が見られ、小学校生活へのイメージやあこがれ、期待感の醸成につながった。また、児童には、進んで幼児に関わる姿や積極的にサポートする姿、優しく接する姿等が見られ、思いやりや自信、自己肯定感の育成につながり、子ども同士の交流の機会をもつことの効果を実践を通して見ることができた。

〈教職員〉

- ・教職員には、ブロック代表としての公開授業や公開保育、ブロック内での保育や授業の相互参観、研修会等を通して、就学前施設と小学校相互の教育内容や方法の理解、子ども理解につながった。保育を参観した小学校の先生方からは「入学した子どもたちは、どうしても最小年齢という感覚で見てしまうが、就学前では異年齢活動の中で、年長者として年下の子どもたちを導く姿が見られ、考えを新たにした」という声、また小学校の学習を参観した就学前施設の先生方からは「子どもたちの1年後、2年後など、未来の姿を見ることができた」という声があり、教職員の交流の意義を感じ取ることができた。

〈教育課程〉

- ・遊びや学習、生活の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を見取る研修を通して、子どもの姿の相互理解と、子どもの育ち・学びの意識化につながった。また、就学前の「遊び」で培われる資質や能力が、小学校での「学習」につながっていくという見方ができるようになってきた。

〈その他〉

- ・各ブロックでは、就学前施設と小学校との連携・接続だけでなく、就学前施設同士の連携の実践にも取り組んでいただけた。小学校へつなげる基盤に就学前施設同士の連携も重要であることを改めて感じた。
- ・公開授業や公開保育と、その後の取組報告、講師の講評等を、一連の発表として聞くことで、就学前と小学校相互の教育理解が図られるとともに、「連携・接続」のイメージをもてることが明らかになった。

- ・子どもたちの期待感・安心感につながる取組、思いやり・自己肯定感につながる取組等、意欲・心情面での成長が期待される取組が多く実践された。また、ブロック相互に取組を参考にし合うことで、取組の充実が図られた。
- ・施設構成の異なる4つのブロックの取組から、全市保幼小各施設が「連携・接続」の取組を進める際に参考になる貴重な実践を収集することができた。

〔課題〕

- ・管理職同士の連携から担任同士の連携へ、また担当や担任同士だけの取組からより多くの教職員で共有された取組へ広げ充実させることが大切である。
- ・教育課程をつなぐ研究、就学前の学びを活かす教育、育てたい子ども像を共有した教育、「育みたい資質・能力」〔3つの柱〕や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の連続性を意識した教育等については、さらに研究を深める必要がある。
- ・5歳児後期における就学を視野に入れたカリキュラムやスタートカリキュラム等、接続期のカリキュラムについても研究を進めなければならない。
- ・研究指定園所以外の就学前施設との連携をどのように進めるか。（指定という枠組みではないところから連携を始めるにはどうすればよいのか）も課題であがっていた。

